

生産者の食の安全への取り組み

注射針の統一に向けて

生産者が責任を果たすべき食の安全への取り組みは、①薬品の残留を決して出さないこと ②注射針や異物の混入した豚肉を供給しないこと、この二つです。生産者に対する消費者の関心もここに集約されることでしょう。

ポジティブリストが施行され、さらに消費者の関心も高まったせいもあって、今まで以上に薬品の使用については細心の注意が必要ですが、②の注射針の統一に向けたグループの取り組みが完成に近いので紹介しようと思います。



セーフティ針の一般的な針の曲がり方。針には粘りもあって、折れにくく混入しにくい



他社のストッパー針。針に変形はなくても、簡単に折れるので現場では使えない

数年前、針の折れにくい「セーフティ針」シリーズが販売された時、グローバルでは真っ先に全国的な採用に乗り出しました。針の強度や混入した際に金属探知機で発見されるかなど、一連の実験や検証をへて専門食肉問屋も交えてどのように対処していくべきかを検討してきました。セーフティ針は、通常の豚針に比べ3～4倍の折れにくさを持っている画期的な商品でしたが、問題点もありました。

離乳後から離乳舎を出る35kgくらいまでの時期に想定してつくられた「セーフティ針細」は、針の内径が極めて細く、粘調度のある注射液にはとても打ちにくいものでした。農場やグループからたくさんクレームが寄せられ、なんとか針の改良を訴えてきましたが、残念ながらメーカーには理解していただくことは出来ませんでした。そのため特注針(1.5mm×15mm)や太くてかわいそうですが、セーフティ針太にゴムストッパーをつけ針長を短くして対処してきました。

しかし8～10万頭に1頭くらいの低い割合ですが、依然として針が折れてしまうケースもあります。そのたびに肉問屋も含めて出荷流通まで追跡して消費者に絶対届かないようなしくみを徹底してきました。

折れる針はいずれも特注針に限っており、何とかこれに変わる安心して使用できる針がないのかといろいろな会社を当りました。そんな時、東京本郷にあるフクイメディカルさんが早く取り組んでく

れたのです。鈴木社長が獣医師だったせいもあるでしょうが、快く引き受けていただき、何度か改良を加えついに完成したのが“**子豚特注ストッパー25**”です。10週令くらいまでの豚に使いやすい特徴を備え、現場で検討改良されたものです。やっと現在のグループの推奨注射針を表のように満足できる形で統一することができました。



特徴は針の基にストッパー(コブ)があり、強い力が加わるとストッパーといっしょに折れるので、絶対針が豚肉内部に混入しないことです。針はステンレス、すべてが職人の手作りなので確かに高いですが、豚肉を安心して生産し届けるシステムにこだわりたい我々としては、注射針混入ゼロになることが目標です。グループ86農場、総母豚数21000頭の今年度の総生産肉豚数は42万頭(全国シェアで約2.5%)にもなりますので、生産者グループとしての責任は重いのです。

先月ご案内しましたが、“子豚特注ストッパー25”は、5ダースから注文をお受けします(送料無料)。出来るだけ多くの農場で使用してもらうことが先決と考えましたので是非ご指名、ご使用ください。

またセーフティ針(細)を継続的にお使いの方で、特にご不満がない場合にはそのまま結構です。在庫がなくなり次第、ご検討いただきたいと思います。

表. グローバルで統一する推奨注射針

適用(想定体重)	製品名	外径×長さ	評価	
繁殖豚	>150	セーフティ針 成豚	1.8φ×38mm	◎
哺乳豚	<10	子豚針C	1.0φ×15mm	◎
離乳豚	10~30	子豚特注ストッパー25	1.5φ×20mm	◎
肥育豚	25~	セーフティ針 太	1.8φ×30mm	◎

子豚特注ストッパー25のみがフクイメディカル社製です。

母豚での豚針(極太)の折れも実は若干あります。これはすぐに廃用するわけでもないので報告がタイムリーに行なわれにくいせいもあるので注意すべき針です。これについては若干短いですが強度の高いセーフティの成豚用に変更することでかなり解決できるはずです。廃豚といえども重要な食材です。状況に応じたフレキシブルな対応で、より良い仕組みにしていきたいと思います。

獣医師として肉芽腫やシコリの原因になる薬品の変更や薬液・注射器の使用時の注意なども現場に普及していくべき大切なポイントとして担当者と一緒に取りくんでいます。以下のヒントを参考にして注射器、注射針の管理責任を十分に施し、膿瘍やシコリ、肉芽腫などが出来るだけ発生しないように努めたいものです。

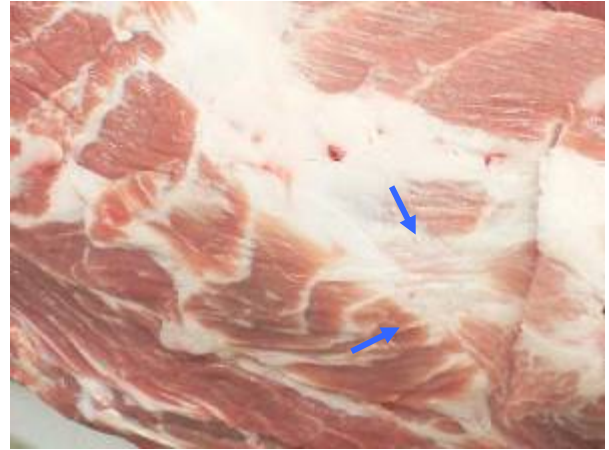
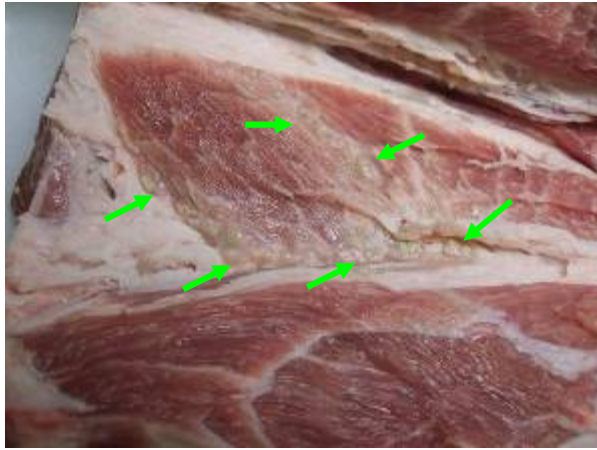
2006年9月 グローバルピッグファーム(株)

注射器・針の衛生管理のポイント

- ・ 針や注射器の管理は非常に重要です
 - ・ 保管場所や管理者の責任を明確に
 - ・ 切れない針や曲がった針は使わないように
- ◎ 注射針の再生方法
- ・ 使った注射器は、必ず水、洗剤、さらに水で洗って、汚れを落とす
 - ・ そのまま「湯沸し電気ポット」の中に入れて熱湯滅菌する(煮沸したりするのは忘れてしまうこともあって危険です)
 - ・ ガーゼなどにくるむと先を傷めません
 - ・ 一定時間後取り出し、乾燥させて保管する(ポイント)

シコリ・肉芽腫情報

- ・ 豚肉内の膿瘍や肉芽腫、シコリは生産者の責任です。
- ・ どんな注射でも一時的な小さなシコリは必ずできます。
- ・ 薬の成分によっては筋肉外に注射されると高い頻度でシコリや肉芽腫ができるものがあります。
 - 基本的にはバイトリルはシコリをおこします。
 - オイルアジュバントは種類によっては、肉芽腫の原因になります。
 - ただし正しく筋肉内に注射できれば、肉芽腫の問題が発生しません(*)。
- ・ 薬液が濁っていたら、肉芽腫や膿瘍の原因になりますので、注射前に確認しましょう。
- ・ 使った注射薬は、原則として「1日以内に使い切る」を基本にしましょう。



(左上) オイルアジュバントによる線状に走った肩ロースの肉芽腫

(右上) アジュバントとは関係ない注射によるシコリ。小さなものなら注射ごとに出来る。

(左) バイトリルによる典型的なシコリ

このような例が頻発すると、肉問屋はかなり神経質になってしまい、パーツスペックで販売できなくなってしまう。

参考トピックス

(*) 耳の後への適切な筋肉注射と想着いても、筋肉の間を伝わって肩ロースにまで広がる肉芽腫が生じる場合があります。発生頻度が高い場合は、注射部位には十分注意しましょう。耳根部(若干膨らむところ)といっても微妙な部位ですので、筋肉間に注射してしまうことがあります。×印(かなり後方で肩部に近い)でも筋肉内注射になることを確認しましたのでお知らせします。

